



## 共益貯金（スケッチ）

池田 大伍

市内場末の人通り少き横町。舞臺前面往還の心、上手ずつと前へ寄せて格子戸を錠めた冠木門、續けて下手見切まで生垣、但し中央廣く破れて觀客席の何所よりも中の仕事充分に見透ける。登場の人物も冠木門より寧ろこの破れより多く出入す。生垣の中はもと庭であつたのを手入をせず、邪魔な樹や枯れた樹は取片づけて廣場にした心。所々植込見すばらし相に残り、下手寄に車井戸がある。正面奥は二階建の長屋、格子戸を錠めた入口、二つ並んで見ゆる。續いて上手奥は植込越しに二階建の横手見える。前の冠木門はこの家に通する心。つまりこの二階建の主人が手廣な庭を半分潰して借家を建て、それがすべてあまり構はずにあるといふ道具。舞臺前左右の見切は植込でよし。但し上手の植込の前に「隋氣に神丹、幸達は勇氣を要す」といふ大字の廣告あるやゝ太き電信柱。

〔車井戸の右におとよ、三十五六の温順しい情に脆そうな質、二軒長屋の右の方の主人、某印刷所の職長の妻、洗濯をしてゐる。同じく左におみち、大柄の十五、我儘そうな質、これも洗濯をしてゐる。上手におとよの子龜太郎、八歳位、つまらなそうに破れた飛行器をもつて遊んでゐる〕

おみち 「疝癪を起したように絞り上げた洗濯物を盥へ打付け、身を揺ぶつて立上り」 あゝ、もう忌だこんなこと。私なんかにさせなかつて出来やしない。「泣聲を出し」 あら忌だ、こんな下手が赤く剝けちやつた。

あとよ みつちゃん、それは慣れないで力をいれてご  
し／＼やるからよ、やつぱり骨で洗はなければいけ  
ませんよ。辛抱してやつてごらんなさい、ぢき出来  
ますよ。

あみち だつてこんなに「とまた泣聲で」赤く剝けちまう  
んだもの、私の手軟かいから無理よ。母さまがすれ  
ばいいのに。

あとよ だつてお母さんは御用が多いから少しは手助  
けしなくつちやあいけますまい。……それに道ちや  
んだつてもう直御嫁に行けば洗濯もしなきやあなら  
ない。今の中苦しんで置けば先へいつて樂ですよ。

あみち 私洗濯する程ならお嫁にゆかない。

あとよ だつて一家のおかみさんになつては遊んでゐ  
られませんかよ。

あみち あら小母さま、忌な、……私おかみさんだ  
んて云はれる所へはこれでも御嫁に往かない積よ。……  
……それから小母さま。もう道ちやんていふのよし

て下さい。「とや、俯眼になり」品が悪いわ。

あとよ あら、それは悪かつてね。ではお道さん？

お道 いゝえ、道子さんていつて下さい。……だけど  
小母さま、これからは學問がなくてはいゝ所へお嫁  
に往れないのねえ。それに母様はもう學校を下つて  
しまへ／＼つていふんですもの、解らないにも程が  
ある「とまた疍を起したように齒を喰ひしぼつて」あんな母様つ  
てありあしない。娘が出世しようとするのが忌なの  
かしら。

あとよ まあ道……いえ道子さん、お母さんのことを  
そんなことをいふもんぢやありませんよ。

あみち でもあたしも疍癩が起つて、起つて「と袂先  
を噛んで引張り」ね、私今裁縫學校へ行つてるでせよ。

それもやつと母様を承知させて上つたの。だけど小  
學の御友達は高等女學校の方なのでせよ。途中であ  
つても肩身が狭いわ。この間もみんなで顔を見合せ  
て、あなた裁縫の方なのつて變な眼をするんですも

の、それなのにこの頃は裁縫學校も下つてしまへつていふんですもの わたしだつて疳がこころわ。

おとよ まあそんなことをいつたつて……

おみち 全く不味ないわ。私なんだつて家の様な所へ生れたんだらう。奥の吉井さんの妙子さんね、何を着たつてあんな縹緞で似合ひもしないのに、始終着物が變つて……小母さま見て？ 過日着てゐた紗縮緬のしぼりのコート。

おとよ へえ、この頃そんなものが流行るんですの。

おみち あら小母さま、忌だ。……けれどあんな縹緞だつてお金さへありさへすれば何んな装だつて出来る〔と當所もなく見るような眼付をして〕私いつそ藝者になつてしまはふか知ら。

おとよ 「眼を瞞つて」まあ。

おみち 墮落だつて構ふもんか。これからの世の中は

お金さへありさへすればいゝのよ。

おとよ そんなことをいつたつて道子さん。

おみち いゝえ、小母さま、そうよ。小母さまの所へよく来るやま子さんね。

おとよ えゝ、おやま……

おみち 何時も好い装をして帶止や指環が始終變つてゐるのね。今大變いゝ所の奥様になつてゐるんですつてね。

おとよ いゝえ、いゝ所つていふ譯でもないんですよ。あれの家も不仕合で藝者に出て漸く堅氣になつてあゝしてゐるんですが、連合が相場師ですから浮沈があるので苦勞は絶えますまいよ。

おみち でもやま子さんはいつも面白相だわ。

おとよ あれは陽氣な質ですから。

おみち 羨ましわ。

〔この時先刻から飛行器をしきりに直しては飛ばそうとしてゐた龜太郎はあと溜息をする。おとよ振返つて〕

おとよ なんだよ、子供の癖に溜息なんぞして……

龜太郎 だつてつまらないや。

おとよ 何かつまらないんだよ。

龜太郎 「飛行器を乗うちらや 母の例へ驅けより」母さん、お錢おくれよ。

おとよ お前、もう今日の朝の分は使つちやつたぢやないか。

龜太郎 でもつまらないもの、飛行器が破れちやつて飛ばないんだもの……

おとよ ぢや表へいつて皆と遊んでおいでな。お前は  
この頃何したんだか、ちつとも外へ出ないで獨  
ばかり遊んでゐるから不味なくつて御錢ばかり使ひ  
たくなるんだよ。さ、少と外へいつて遊んでおい  
で。みんなで毎日戦ごつこをして面白そうぢやあな  
いか。

龜太郎 だつてえ……

おとよ なにがだつてだよ。さ早く行つて遊んでおい  
で。今日は日曜でお父さんが家においでぢやあな  
か。叱れるよ。

龜太郎 だつても忌だあ。

おとよ お前、では表の子達と喧嘩でもしたのかい。

龜太郎 うん……「と顎を振り急に思出したように」母さん

空氣銃を買つておくれよ。

おとよ 何だい、またそんなことをいつて。空氣銃だ

なんて、三圓も五圓もするものを、云付ますよ、お  
父さんに。

龜太郎 いやだあ、云付けちやあ。……母さん、何し  
ても空氣銃買つてくれないの。

おとよ 飛んでもない。五圓も三圓もするもの。買へ  
やしないよ。

龜太郎 「鼻をならして」だつて欲いなあ。欲いなあ。

おとよ 「漸く洗濯の手をとめて」お前ほんとに此頃どうか

したねえ。大概今まではいけませんよといふと一度  
ですよす子だのに。此間から空氣銃を買つてくれ〜  
つてお父さんの眼のない所だと私にせがみ立て〜  
……何うしてあんな物が欲しくなつたらう。え、

お前何うしてそう欲しいんだい。

龜太郎 「駄つて武を喰んでゐる」

おみち そりあ小母さま、みんなが戦争ごつこで空氣銃を持つてゐるからそれで龜ちやんも欲しいのよ。

ね龜ちやんそうでせよ。

龜太郎 うん(とうなづく)

おとよ あゝそうかい。道子さん、そんな高いものをみんな持つてゐるんですか。

おみち え、表の子はみんな持つてますわ。だから小母様も買つておやんなさいよ。

おとよ まあそんな高いものをみんな持つてるんですか。へえ今の小供はほんとに贅澤になりましたねえ。

おみち おほ、小母さま、仰山ね。時勢が變つてゆくだよ。世間がそうなるんですもの、仕方がありませんわ。

おとよ

「龜太郎に」あ、それでお前はどの頃學校から歸つてきても外へゆかないで家にゐるんだね。何も怪

しいとおもつてゐたよ。……だけど先にはお前も學校から歸るとすぐ「戦ごつこ」だつて復習もしないで驅け出そうとしたぢやあないか。

龜太郎 だつて先は飛行機隊だつたの。だけれど「損れ

た飛行器を不味なそに見て」損れちやつたから……

おとよ まあ、もう損れたね、なんだつてまだ破れそうにもしないものを破しちやつたんだい。

龜太郎 だつて僕が破したんぢやあない。向ふ横町の子が破したんだよ。

おとよ なんだつて人に貸したりなんかするんだよ。

龜太郎 うん、貸しはしないよ。敵なんだよ。

おとよ まあ呆れたね。ぢやああとでお父さんに直しておもらひな。

龜太郎 うん、直したつて駄目だ。もつと好い飛行機でなけりあ戦闘力がないつていふんだもの、飛行機ならもつと好いのを買はなかつちやあ。

おとよ まあ仕様がなないね。ぢやあ空氣銃がなけりあ

みんなが遊ばないといふのかい。

龜太郎 あゝ戦鬪力のない奴が戦線にゐては邪魔だつて突き飛ばすんだもの。

おとよ まあ非道い子達だね。そんな子と遊んでもらはなくつてもいいよ。家で遊んでおいで。

龜太郎 つまらないなあ。不味いなあ……

おとよ 何だよ。そんな我儘をいふとお父さんに叱れるよ。

龜太郎 「泣顔になつて」でもつまらないや。

おとよ まだそんなことをいふ。「と帯の間の巾着から小鏡を出して」さ、おや今日はお晝からの分の御小使をあげるから、もうそんな事をいふんぢやないよ。お父さんに叱れます。

龜太郎 おやあどうしてもいけないの。

「と悄然と表の方へ出てゆく。おとよ可愛想だといふような顔をして見送る。おみち親子の話の間手持ないのでまた不精無精片手でなまけたような洗ひ方をしてゐたがこの時また立上つて」

おみち 小母さま、みんな持つてるのに龜ちゃん一人

持たなくつては片身が狭くつて可愛想よ。買つておやんなさいよ。

おとよ だつてそんな高いものを勿體ない。小供なにかに。

おみち あゝ小母さんも内の母さまの様ね。使ふ爲の御金ぢやあないの。片身せまく暮す位ならいつそ死んでしほう方がいい。

おとよ 「少し憎れたように」そりあ私も買つて遣りたいのは山々ですが、夫のがそらいふ事は八釜しいものですから……

おみち あら小母さま内所だつて買へるぢやありませんか。

おとよ いゝえ家ではちつとも内所といふことが出来ませんの。

おみち あら何故？

こゝへ前の往來からおとよの姪のおや、まあ懸りおとよを見ては、いや

「だ摩を出して。」

あやま あや、叔母さん。しばらく。

〔と蝙蝠傘を拵めて垣根の破れた間から入つて来て傍へよる〕

あとよ あらやまちゃん、今日はどうしたの。

あやま 暫く御無沙汰をしたから其處まで買物に出た序に一寸よつたの。

あとよ この頃吉山さんは何うなの。

あやま だめよ、この頃は戦争で場の方がちつとも動かないから。それに此二三日出たつきり歸らないの。わたし行つてる所もしつてゐるの。だが嫉いたつて嫉き切れないし、馬鹿々々しいから打棄つておくの。……あら道ちゃん、しばらく。

おみち やま子さん。いゝバラソルね。レースね。それ新流行？ 奥の吉山さんの妙子さんのと同なじね。

あやま なに安物よ。一昨日三越へ一寸いつたので買つてきたの。あ、そらいへば叔母さん、三越へ行つて？ 素晴しく普請が出来てよくなつたの。

あとよ おほい、わたしは先の三越たつて電車の硝子

越しにみたばかりだよ。……

おみち やま子さん、三越大層立派ですつてね。

あやま えい、だが全くあすこへ行くのは眼の毒ね。欲しいものだらけで動けなくなるわ。そりやいゝ柄の夏帯があつてよ。

あとよ おまへは相變らずそんなことばかり云つてるね。

おみち あら小母さま。だつて衣服は女の生命よ。

あやま 全くだわ。良くみえるのも悪くみえるのもみんな衣物にあるわ。今そこであつた女、慄いつきたい様な明石を着てゐたの。女はそんなによかあなかつたけれど明石てものは全く立つものね。私もあの柄が欲しくなつた。何所にあるのだらう。

あとよ お前の様に欲しがりやもないね。そんなに何枚も着物があつて何うするの。着切れないぢやないか。

あやま あら着るから欲しいいつてもんぢやあないわ。  
 毎日筆筒の引出しを明けてみてゐるだけでも氣持が  
 いゝわ、ほんとに欲しいとなると寐られないことが  
 あつてよ。

おみち 全くよ。奥の吉井さんの妙子さんなんか一枚  
 着物をこしらへる度にその姿で寫眞を取つてよ。そ  
 の寫眞が「と手で仕方をみせて」こんなにあるの。全くあ  
 んなに着物が出来たら何なにいゝでせう。：：わた  
 し考へると不味ない。

おとよ 「態と話を外らして」それはそうとお前また吉山さ  
 んが始めたのかい。困つたね。

あやま いえ、始めたのぢやあないの、先からのよ。  
 あたしもうつく／＼此頃堅氣もいやになつたからま  
 た商賣に出ようとあもうの。

おとよ まあなんだよ。折角こゝが辛抱どころぢやあ  
 ないか。

あやま でもねえ。わたし不味ないもの。あの人ばか

り外で勝手な眞似をして：：私だつて生身を持つて  
 ゐるんですもの。すこしは疝も起るわ。この間もあ  
 んまり腹が立つたから留守だつたけれども明つ放し  
 にして寄席へ行つてやつたの。そうしたら福助が出  
 て槍さびがよかつたわ。丁度私吉山の金を少し預つ  
 てゐたから呼んで遊んでやらうと思つたけれど何う  
 していゝか分らないから止したの。：：あゝ不味な  
 い。あんな得手勝手な人はありあしない。商賣して  
 ゐた時分には随分いろ／＼深切に云つてくれた人も  
 あるんだもの。：：そういへばあの寶井さんはどうし  
 たらう。ほんとに考へると不味ないわ。

おとよ だけとお前そんな呑氣なことをいつてゐて先  
 行どうするんだよ。

あやま どうするつてあんな當にならない人をあてに  
 してゐたつて何うなるもんですか。わたし仕たいこ  
 とをして三十位で死んでしまへばいゝわ。先のこと  
 なんか考へて暮しいけるもんか。



おとよ ま、お前道子さんと同なじよつなことをいつてるよ。

おみち だつて小母さま。だれたつて全くそうよ。思ふことが出来なきあ死んだ方がましよ。

おとよ だつて今日の御飯が樂に戴けたらそれで結構ぢやありませんか。

おやま あらそれぢやあつまらないわ。

おとよ その代り安心だよ。家では一錢でもみんな小使帳をつけることになつてゐますの。道子さん、

それだからわたしの勝手にあれへも空氣銃を買つてやれないのですよ。……そりやあ私だつて龜になにか強請られた時にはみすく可愛想だと知つてゐて

叱りつけるのは辛うござんすわ、あゝまで堅くしな

くつてもよさそうなものだと少とは腹の中でうらめしいこともありますけれど、夫は何でも整然とし

た事が好きですし、あんな商賈はしてゐますが割に學問もあるとかで奥の吉山さんなども始終ほめてお

いでなさるので、私には解りませんがあの人のすることだから間違はないとおもつてその通りにしてゐます。それに記帳面で、わたしが用の合間に新聞の端だの、曆の端へ書付けておくのを自分で日曜日にちやんと小遣ひ帳に清書しますの。ですから私も何うしてもそうするようになりますの。

おみち まあ大變ね。それぢやあ一錢でも小母さまは勝手に使へないの。

おとよ えい。

おやま 全く究屈ね。わたしなんかぢやあとても辛抱が出来ないわ。あ、そう叔母さん。わたしこの頃自分で御小遣を稼ぐのよ。

おとよ まあ何うして？

おやま あたし毎日氣配をみて場を買うのよ。吉山に内所で……

おとよ まあ、お前相場をやるの。

おやま えい、少し、でもうまいわ。この間も一日で

二十圓儲かつたわ。それで隠しといたら吉山に目付  
けられて持つて行かれてしまつて口惜しかつたわ。

おとよ まあ呆れたねえ。

おやま あら叔母さん。此頃はいゝとこの奥さんはみ  
んなやつてるわ。それで御小遣ひ取りをしてゐるの。  
學校の先生にだつてやつてるのがあるわ。吉山が注  
文を取りにゆく家にもいくらもあつてよ。あの山内  
裁縫女學校の校長さんも吉山の御得意よ。わたしな  
んか遣るのは當り前だわ。

おみち まあぢやあ家の學校の校長さんもやるの、ま  
あ先生だつてそうなんですよのねえ。

おとよ まあやまちゃん、お前そんなことを道子さん  
に聴かしちやあいけなないぢやあないか。

おやま だつてねえ、道つちちゃん。本統のことを話す  
んですよのね。

おみち えんそうですよ。

「この時お道の家より母の聲にて「道や、道や、一寸来ておくれよ」

と聲をかける。

おみち 「また疝を起したように」あら母さま。私今お洗濯よ。  
そう一度になにもかも出来ないわ……「とおやまの方を  
振り向いて」 私全くやま子さんが美ましいわ。

おやま おや、何故?

おみち 何故つてあなたは自由におもつたことが出来  
るでせよ。……ほんとに私も藝者にならうかしら。

おやま おほい、道つちちゃんが……

おみち でもなまじ不味ない所へ御嫁にいつて苦勞す  
るよりその方が増しでせよ。

おやま まあそりやそうだわ。男なんて何うも當にな  
るもんぢやあなし、當になれば御人好しか生地なし  
だし……

おみち そうでせよ。いつそ藝者になつて男なんかお  
もちやにしてやつた方がいいでせよ。

おやま ほい、だけど道つちちゃん、女は弱いものでそ  
うも行かないものよ。誰れも始めはそういつても、

遂、男の甘い口にとると欺されて諦めて知りながら  
我慢をしてみようようになるのよ。あら飛んだこと  
で惚けて失禮。

おとよ やまちゃん、お止しよ。今日は叔父さんが家  
だよ。

おやま あら、叔父さんが家？、私あの叔父さん全く  
氣ぶつせいよ。ちや歸らう。いづれ又。

おとよ あれお待ちよ。今ねてゐるんだから。昨夜急  
な夜業があつて今朝夜明けにかへつたもんだから：

……

おやま そう、そんならいゝけれど……

〔此時またおみちの家より母の聲にて「道や、道や、後生だから来て  
おくれといふに、私はいま手が放せなくて困るんだからさ。」と聲  
をかける。〕

おみち えい、うるさい。私もう忌になつてしまいうわ  
おとよ まあ道子さん、お母さんがお困りでせうから

行つておやんなさいよ。

おみち、「不精不精に」えい、……用は解つてゐるのよ。

必然また御使ひに行けといふのよ。私八百屋へ大根  
やおねぎを買ひに行くのは全く思ひよ、なんだか極  
が悪くつて。此間なんか漬物屋でお煮豆を買つて出  
る所を學校の御友達にみられて私顔から火が出て立  
竦んだわ。

〔此時また母の聲にて「道や、道や」とやゝじれて呼ぶ〕

おみち はい、今行きますよ。

〔と盥を持つてぶりくして家の裏手へまわる〕

おやま 「見送つて」中々我儘をな子ね。

おとよ あゝそうらしいよ。あすこのお母さんが學校  
の方を下けたがつてゐてそれを口へ出すと最じれて  
泣いて泣いて仕方がないんだつて。

おやま まああんな大きな丈をして……

おとよ あゝ、何うも手がつけられませんで、お母さ  
んはとぼくしてゐるんだよ。

おやま まあ親不孝ね……〔と語を變へ〕實は叔母さん、

私今日はちつとお願ひがあつて上つたのよ。……叔父さん今ほんとに寝てゐて？

あとよ あゝ寝てゐるよ。そして用つて何？

あやま 實はね叔母さん、此頃吉山がちつと曲りなの。それで一つは自棄で遊んでも居るようなの。それは遊んでゐるのは構はないけれど大分家のものを持出してゐるの。

あとよ まあそれは困つたね。

あやま 何場の方は全く切つちやつた譯ぢやあないかい。らしいけれど、何しろ此戦争の爲に場がちつとも引立たないでせよ。尤も最うそれもこゝ一寸で來月になるともう戦争も講和になるつてえ噂よ。それは世間へは知れなくつてもあすこへは不思議に早く知れますからね。講和風さへ吹きさへすりあ全然景氣がなほるのだけど、この處が一寸苦しいの、それでね叔母さん、この處だけ一寸二十圓程用立てゝくれない？ いけない？ 叔母さん。

あとよ まあお前、私にそんなことが出来るものかね。叔父さんにやあ叱れてしまふよ。

あやま だから叔父さんに内所で……

あとよ 私は叔父さんに何一つ内所の出来ないのはお前さつき話したぢやあないか。

あやま そう、ぢやあ何しても出来ない？ 困つたわねえ。……だけど叔父さんは大分貯金が出来てゐるつてえ話ぢやあないの。その中を少し位叔母さんの自由にならないの。

あとよ そんなこと出来るもんかねえ。それに叔父さんは何か考へがあつてこうやつて儉しくして御金を貯めてゐるのだから……

あやま 叔父さんはその中で用立てゝくれないかしら。なにも返へさないといふんぢやなし、一時の融通なんだから……

あとよ 何といつてもそれは駄目だよ。叔父さんの方は……それよりお前いゝ石入の指環を二つも箆めて

ゐるぢやあないか。それを一つ放はなしたつて二十圓位  
出来そうぢやあないか。

あやま これつ「と指環を押へて」これを今放しちやあ損  
よ。引取る時は二東三文だから、…だが困つたわ  
ねえ。

「こゝへ下手奥より裏の長屋にあるおきわ五十五六の瘦せぎすのした  
たか者らしい婆あさん、共益貯金株式會社の勧誘員、三十四五の洋  
服男を連れて出てくる」

あきわ あや、奥さん。いつも御勢が出ますこと。ほ  
んとに御感心でゐらつしやいますね。いつも奥さん  
の手をお空けなすつてゐらつしやるのを見たことが  
ない。あや姉ちゃん、いらつしやい。いつも御奇麗  
ですこと、まあ〜お髪がよく…あの奥さま、あ  
の此間お願ひしましたこと、如何でございませう。  
旦那様へ御願ひ下さいましたらうか。

あとよ 此間のつてあの無盡のことですか。あれなら  
話だ支けはいたしましたか御斷り申せといふことでし

た。何分夫のは堅いものですからそういふ事は…

あきわ あれ奥様、そんなものぢやあございませんよ。  
私わたしなどはよく分りませんが、大體おさくと大相得な  
ことの様ぢやあございませんか。…あ、それで今  
日は會社の人を連れて參りましたからお聽なすつ  
て。…さあお前さん、この方が最上さんの奥さま  
だよ。

勧誘員 「帽子を取りて」え、始めまして、…え、  
手前共がお勧めをいたして御加入を願ひますことは  
最も有利な利殖法で毎月一回宛ございます抽籤に御  
當りにさへなれば其金を銀行へお預けになつてお置  
きになつてその利子で殆ど跡の懸金が御拂ひになつ  
ていけます。で何年かの後には唯で全部の金が御手  
に入ります。また幾分の利を御覽になつて他人に賣  
渡してお仕舞になることも出来ます。…それに此  
方こちら様などで決して連帶保證を願はんでも始終あき  
わさんから伺つて居りますし、此方様の御預金のこ

ともお取引銀行の方で伺つて居りますので……

あきわ ほんとに奥さま、御入會なさいよ。そして當つて御覽なさい。そのお金はわたしがまた例の方へ廻はして立派に利を上げて見せますよ。そんな風に幾口も預かつてありますので……

あつよ ですからけれども手前共ではさういふことは一切……

あきわ なんの奥さま、いゝ所の奥様でも皆さん、なさいますよ。此からは地道の御商買では何方様でも喰へておいでなさるばかりで、召物を造へたり、芝居を御覽なすつたりなさるのは利の薄い御商買の方では出ませんで、みんな此ういふことをなさるので……そりやもう本真で、私などお預りして利を廻してゐる方がいくらかもございませすよ。ほんとに御入會なさいますしよ。面倒なことは少ともないのでござりますから……

勧誘員 「規則書を折麴の中から出し」こゝに規則書が御座い

ますから御覽下すつて「と無理におとよに渡す、おとよ余義なく受取る」それにも御座います通り手前共のは創立も古く、取引銀行もみな信用がありますので……現時頻々とお出きる富籤類似のものとは違ひますので、決して御損になるといふ様な結果はございませんで、何うか篤と御勸考を願ひまして……

あきわ ほんとに奥さま、さうなさいませすよ。此方の様に銀行へばかり御預け入れもようございませすが、あの坂上の銀行へ千圓からも御預けいれがあるつていふぢやありませんか。そんな大金を遊ばせてお置きなさつても勿體ないぢやあございませせんか。

あやま 叔母さん、そんなにまあ銀行に預け金があるの。そんなら私に……

あつよ だつてお前それは叔父さんが何か考へがあつて積んでるお金で餘裕のあるお金ぢやあないんだよ。……あのあきわさん、私共は逆も駄目ですが、お隣のお母さんが御話をさいて此間入りたい様なこ

とをいつておいでなさいましたよ。

あさわ 「大仰に手を振つて」だめ、だめ、逆もお隣では毎月の懸金が出せますもんか。あの娘の學校の月謝だつて苦しい位ですもの。「とお道の家を見て小聲になり」あの子のお父さんていふのが年は老つてゐるし、區役所へ出て幾何も取れやあしないのでせよ。その中で學校でもないぢやありませんか。それであの娘が口ばかり厭にあまつ足るく母様、々々つてあんな暮しをしてゐて見られないぢやありませんか。やつぱり學校で教へるんでせうね。あの子は一寸子柄もいゝし、藝者にでも出れば家は樂になるんですが、……私も口をかけられて口を利いてみたこともありませんが、あのお母さんが愚痴ばかりいふばかりで娘の云ひなり放題ですから……それに引代へて此方さまなんどは旦那様はあの通りの稼き人ですし、奥さまは働き手ですし、月に五圓位のこととはなんでもないぢやありませんか。

おやま ほんとに叔母さん、お入んなさいよ。毎月五圓位どんなことをしたつて積めるわ。

おとよ そんなことをいつたつて叔父さんはそんなこと大嫌ひだよ。

おやま ぢや私が入らうか。當れば一寸旨いのね。

勧誘員 え、何うぞ願ひます。

おやま ぢや私入つてよ。

勧誘員 「折靴より證書を出し」え、ではこれが證書でござ

います。これへ御名前を御記入下さればよろしい

ので……

おやま あゝそう。

おとよ やまちゃん。そんな事をしていゝの。吉山さん。に。

おやま 吉山に出して貰はなくつたつて毎月五圓位どうにでもなるわ。

勧誘員 「おとよに」それでは恐れ入りますが、此方様で御保證をなすつて下さいまし。

おとよ え、保證ですつて。

勧誘員 いえ、その少しもむづかしいことではないの

でほんの規則でございますし。それに吉山さんの方

もしつかりした方であらうしやることは御身装を拜

見した丈で分つて居りますが、ほんの規則で……

おとよ でも判事は一切うちの留守には扱ひませんか

ら……

あさわ では奥様、そんならこうなさいましな、二人

で一口お入りになつたら。お一人二圓五十圓位です

もの。手前共などと違つてこちら様ならそれ位のこ

とは何うともなりませんわ。

おとよ ですからね……

おやま 叔母さん、それ位のことはしてくれてもいいわ。餘まりだわ。

おとよ そりあ私もしてやりたいが何令にも主人が堅

いから……勸忍しておくれよ。

おやま 叔父さんだつて餘まり馬鹿々々しいわ。そん

なに究屈な思ひをしてお金を溜めてどうするのだら

う。そんなにして欲しいものも買はず、喰べたいもの

を喰べずにゐてふねと煩らつて死んでしまつた

らどうするのだらう。不味ない。

あさわ 全くですよ。儲けられるものはなんでもお儲

けなすつて而うして少しは奥様の欲しいものもお買

ひなすつたつていゝぢやありませんか。

おやま 本真だわ。叔母さんだつてそんなに何も要な

い譯ぢあないんでせよ。

おとよ 「稍俯目になつて」そりあ私だつて少しは樂もして

みたいし、……なによりも小供には欲しいといふも

のは買つてやりたいわ。

あさわ あ、さう、此間表でこちらの坊ちやんが泣い

てゐるので何うしたんですと何ふと空氣銃が買つて

貰へないのでみんなが遊んでくれないと仰いました

よ。まあお可愛想に、小供衆ですもの、欲しいものに

見界はありあしませんわ。こちら様で少し奥様があ



小遣をお取りなさらうてえ御心をお出しなさりや空  
氣銃位の譯はないぢやありませんか。

おやま そうだわ、叔母さん、あんまり欲しいといふ  
ものを買つてもやらないと子供はいぢく育つわ。

勧誘員 ではせめて保證の方だけ願へますまいか。

おやま 叔母さんの保證であたし入れるのだから是非  
さうして下さいよ。わたし叔母さんの迷惑になるや  
うなことは決してしないから、たつた五圓づゝでせ  
よ。何んなことをしたつて拂へますわ。

おとよ でもねえ……

おやま 「昂然として」そう、そんなに私信用がないの。

いゝわ。

おとよ あれ怒つてはいけないよ。お前はやつぱりお  
前のお母さんに似て怒つばいよ。

おやま どうせ母の子ですもの「と泣聲になり」保證して  
くれなさあ、無いでいゝわ。お母さんのことまで言  
はなくつたつていゝわ。お母さんがやくざだから私

もこんな身になつたのよ。

おとよ あれ何だね、お前。

「こゝへ往來の下手より搗米やの米、米を搗いで通りかゝりおとよに  
「今日は」と挨拶をして行過ぎようとする。おきわ見つけて往來へ追  
掛けて出る。」

おきわ あい、米さん、己がこゝにゐるのを知らん顔  
はひどいよ。

米 なに知らん顔はしねえ。

おきわ 知らん顔をしなさあなほ圖々しいよ。お前こ  
の頃己の影をみると逃げてはつかし居るぢやあない  
か。一體あれはどうしてくれるんだい。

おとよ どうするも有るもんか。返さないと云やあしまい  
し。この間己が受けた時返さうといつてもお前取ら  
ないと云つたぢやあないか。

おきわ そりあ期限も來ないで返されちや利子の帳面  
づらが合はないから受取らないといつたのだ。己も  
他人の金を冗談に預つて融通してやしないよ。だが

期限が切れて返へさなきあ黙つてはゐられないよ。  
米 へん返さうといつた時に取つてくれなきあ、此方

とらの身にそんな餘分な金が何時まで附いてゐるも  
のかあ。お蔭であの時金があつた計りで馬鹿あして  
義理の悪い借金まで出来た。これもあめへのお蔭だ。  
あさわ え、馬鹿にするな。女だともつて。

米 なに、あめへを女だともふものか。

あさわ 何んだつて！

米 まあ怒るなよ。あの金だつて唯の貸借とは違ふぢ  
やあねえか。お前の所へ集まつた時の退引ならねえ  
背負込みぢやあねえか。それを知つて、餘り業突張り  
過ぎらあ。

あさわ なに業突張りだと。此奴！

〔と掴みかゝらうとする。米身を退いて〕

米 よせよ。己は構はねえが衣服へこの白いものが  
附着くぜ。

あさわ えい、ほんとに手の附けられない奴だ。

米 あは、全くだ。だから己の借金は何かい、玉を世  
話をして儲けた時に差引いといてくれ。

あさわ えい、此畜生、また馬鹿にするな。

〔と掴みかゝる。米も米袋を脇へ置いて掴み合ひになりかゝる。勸誘  
員垣の中より出てきて問へ入る。〕

勸誘員 まあ止せ。止せ。

米 なにが止せくだ。月賦洋服を着やあがつて大風  
なことをいふな。

勸誘員 なんだつて。

米 なに傍へ寄つて洋服が破けるといけねえと云つた  
のだ。

勸誘員 なんだ、怪からん。

〔と三人掴み合ひになりかける。おとよ。あやま呆れて後でみてゐる。〕

往來の下手から巡査、山岸準、一巡廻してくる〕

準一 あい、なにをするのだ。

〔と引分ける。勸誘員巡査を見ると後へ下つてその眼を避けるように  
してゐる〕

準一 おい、何してこんなことを始めたのだ。

米 へえ、何斗屑ないことなので。

準一 何斗屑ない？ 斗屑ない事で喧嘩をする奴があるか。

米 へえ濟みません。

準一 「おきわに」おい、何うしたのだ。

あさわ いえ貸金の催促をしてをりましたので……

準一 貸金の催促に喧嘩が要るのか。

あさわ いえ返へさないと、申しますものですから  
遂……

米 いえ、返へさないと申しはしません。

準一 一體何の貸金だ。

あさわ へ？ いえ、なにいゝんで……

準一 なにいゝ？ いゝ貸金なら催促しなくつてもよ

からう。「米に」おい何の貸金だ。

米 へえ、何よろしいので……

準一 借りた方でよろしいといふ貸金があるか「とおき

わに」おい、あまへの家はこの頃大分夜更けてまで騒  
々しいが氣を付けんといけんぞ。

あさわ へい。

準一 あいお前は用の途中だらう。早く行かないか。

「米辭義して米を擔いで上手へ入る」

準一 「おとよに」やあ奥さん、今日はこれで非番ですか  
らあとで最上君の所へお話しに上ります。最上君も  
家でせよ。今日は日曜だから……

あとよ えゝ家に居りますよ。

準一 ぢやあとで上りますよ。

「と行掛けてふと勸誘員を見てじろく見返りながら上手へ入る。勸

誘員顔を反けて視線を避ける」

あやま 「準一の影を見送つておとよに」叔母さん。ね、どう

か保證して下さいな。

あとよ まもうそれは堪忍しておくれ。

「この中おきわと勸誘員垣の中へ入つて」

あさわ 何うも騒がせ申しまして……あんまり非道

い奴ですから腹が立ちまして……いかにございませう。先刻途中で御話しが消へましたが、一口お二人で御入りになつて二圓五十錢といふのは……

おとよ そりや一口二人で二圓五十錢位といふのなら成程出せないこともないですけど……

あさわ それにこれが外の御無駄費ひといふのではなし。いかにございませう？

おとよ さあ、まあ考へさせて下さい。直ぐ御返事も出来ないから……

あさわ あ、成程、あんまり御強ひ申すもいかに、ではまた後に上りますから、何卒よろしく願ひます。では姉ちゃん、失禮を。さ、あいだよ。

〔おとよ、勸誘員挨拶して下手奥へ入る〕

あやま では叔母さん。二圓五十錢宛なら出して……

おとよ さあ、それ位ならどうか出せないこともないね。一日一錢づつだもの。一寸々々小遣ひに氣を付けねえ。……

〔こゝへ上手奥の折枝を開けて吉井勸誘出てくる。この二軒長屋の持主、五十四五。〕

吉井 やあ御家内。最上さんはゐるか。

おとよ あや吉井さんでいらつしいましたか。夫のは昨晩夜業でまだ臥つてをりまするが一寸起してまゐりませう。

吉井 いや、起さなくてもいいよ。別に大した用でもない。

おとよ はあそうですか。……あや起きた様ですよ。

吉井 あつ、顔を洗つてゐなさる様だねえ。

〔右の家の格子戸を開けて最上重治タオルで顔を拭きながら出てくる〕

吉井 やあ最上さん、御眼覚めかね。昨夜は夜業で晩かつたそうだね。

最上 えい。何も時間の定まらない職業で……

あやま 「急にそはくして」叔父さん。今日は……叔母さん。私家を明放しにしてきたからこれで失禮して

よ。

おとよ あらもうお歸りかへ。

おやま え、また直ぐ上りますわ。ちや左様なら。

叔父さん左様なら。

「と挨拶して吉井に目禮し、急いでかへつてゆく。」

おとよ 「吉井に」さあ取散らしてございませうけれど御入り下すつて……

吉井 いやこゝの方が晴々として結構……憚りですが

おかみさん。あの椽臺をこゝへ運んで下さい。

おとよ はあ、さようでございませうか。

「と二つの入口の間の羽目に立てかけてある椽臺を下して直す。吉井

と最上掛ける。おとよ煙草盆など運ぶこと。」

おとよ では甚だ失禮ですが私は勝手に用事がござい

ますから御免を蒙ります。

吉井 さあ〜どうぞお構ひなく。

最上 あい。もう晝飯の仕度か。そんなに寝たか。

おとよ え、もう彼は十一時ですよ。

「といひながら盥の中のものを手早く絞りバケツへ移し、盥の水を明けて盥を井戸側によせかけバケツを持って格子戸へ入る」

吉井 「見送つて」實に御家内は感心だねえ。温順しくつ

て口数は利かず。それで働さもので全く最上さんは

いゝおかみさんを持つて仕合せだよ。

最上 なにあれは馬鹿です。

吉井 え？ 「と笑つて」いくら自分の家内でもあの御家

内を馬鹿とはひどい。

最上 いえ、ほんとは。私が附いてゐる中はいゝが

私の手をはなれたら困りませう。

吉井 なぜ。

最上 たゞ温順しいばかりで考へといふものが少とも

ありません。ですから私もまあ何うか私が無ければ

何うにか樂にしてやつて行けるだけの事はしてゐい

てやりたいとあがいてゐるのです。

吉井 うむ、有難だね。ちやあ御家内の方がいゝ御亭

主をもつて仕合といふべきだね。こりやあ先刻のは

君の御商賣の方でいふ訂正だ。あはゝ。……さうだ、そこでこの間君に話した今度の新築の方の家作ね、愈その一戸へ君が入つてくれるかね。無論君の様な人が入つてくれりあ私の方ぢや大歓迎さ。ありあ君も知つての通り私の理想的家作さ。で成るだけ借り手の人選をしたいのさ。

最上 無論私が拜借が出来ればいたしたいので……

吉井 では愈なにか商賣を始めるのですかい。

最上 えゝ。貯金が千圓に達したらあれになにか商賣をと心掛けて居りましたので。……勿論あれの事ですから氣働の要る商賣は出来ませんが……何かこう小間物やでもとおもつて居りますので……

吉井 うむ、えらいね。私はあなたのもとを知つてる丈けに餘計感心するよ。小舟町で近江屋といへば聞こえた荒物問屋さんの一人息子さんだつたが、叔父さんが悪い爲にねえ。

最上 なあ、矢つぱり私が馬鹿だつたので。何うせ叔

父に取られる財産なら遣ひ無くしてみせてやるつて勢で無茶苦茶にしてしまつて……

吉井 そりあ全く若い氣で無理はない事さ。だがその後あの叔父さんは何うしましたい。

最上 えゝ、叔父もその後好い事もなく貧乏して此間手紙をよこして免してくれといつて死にました。兩方こうなる位ならあの時ち互ひに意地を張つて力まなくつてもよかつたでせうに、あはゝ。……併しまあ私は派手な暮しもしてきて面白い目も可笑しい目もみてもう世の中にこれといふ願もありませんが、今の妻は身を落してから縁あつて貰つた女で、年中働きづめで何一つ嬉しい目もみた事もないとおもふと可愛想で、まあ一刻も早く少しは樂をさせて遣りたいとおもつてゐます。で時には可愛そうだとおもつても無理な小言もいふのです。

吉井 なるほどね。承はると益々感服だがお家内も中々えらい。よく君のいふ事をきいてさうして遣つて

ゐる所が感心だ家の家内なんぞはもういゝ婆あさんの癖に娘と一緒に何かと私にせびり立てる。

また娘ときちあ私に内所でお袋と相談しちやあ買物だ。此間も外で御辭儀をされて何所の華族の御嬢さんかと思つて叮嚀に挨拶しようと思ふと自分の娘さ。馬鹿々々しい。何時の間にか親父の知らない間に素晴らしいものばかり持つてゐる。

最上 いや世間の風潮がそうなつてきたので……

吉井 いや全くそうだ。近頃は女ばかりぢやない。男までも贅澤になつて……昔は夏冬仙臺平が一着ありあ儀式用に間に合つたものだが當節は縞縞、極暑になると紗だなぞと、無いと極りが悪い様な世の中になつて仕舞つた。尤も昔だつてあの傀儡師の淨るりに「紗の紗の袴、紗の袴」てまのがある所をみると紗の袴はあつたに違ひないが貴人の穿き料だつたとみえる。

最上 あは、吉井さん今日は清元ですな。

吉井 あは、私だつて年中一中の講釋ばかりはしない。

最上 ですが矢つぱり近頃も一中ですか。

吉井 いやあれは止めた。此頃は植木ですよ。いやそれでまた講釋がある……

「こゝへ上手より先刻の巡査山岸準一、非番になつて湯に行つた歸りがけてかすりの單衣、濡れ手拭と生卵を三つばかり入れた紙袋を持ち出てくる。」

山岸 やあ今日は……おつ吉井さんもおめでとすね。

吉井 やあ山岸さん、今日は非番ですか。さあ、こゝへおいでななう。

山岸 はあ、有難う。「と椽臺の端へ卵をおき」おつと吉井さん、手を附かずに下さい。僕の生活の糧が滅茶滅茶になる。

吉井 何ですつて「と吃驚して」あは、生卵か。山岸さん、これを飲むのですか。

山岸 そうです。非番になつて湯へ入つて歸つて茶碗

へこいつを破つて三つ一時にのむ。するとすつかり元氣が恢復する。今の私の最大快樂です。

吉井 あは。單純な快樂ですな。併し全く山岸さん  
もえらいな。

山岸 え、何故です。

吉井 いや、今、世の中が段々贅澤になつてゆくといふ話をしてゐたので、君などもまだお若いの中々感心だ。

山岸 いや、えらいといふのは最上さんの奥さんだ。女で見得もなく絶えず手を働かしてゐられる。そりやどうも近來の女ときてはかなはん。僕などはこ  
ういふ風な職にゐる丈け社會の裏面が分るので厭になる。此間なども僕が立合つた萬引などは全く立派な資産家の嬢さんでその遣口は全く黒人跣先だ。白絹などを眞中の心をぼんと抜いて二つに折つて懷ろへ入れてた。それで曝れたとなると頭の毛を目茶々々にして泣いて殺してくれつて傍にある硝子拭きの

機發の瓶へ手をかける。何うも恐ろしい位だ。それ  
でみると容貌もいし、淑かで、何うみても立派な  
娘さんだ。あゝいふのを見ると實際女は恐ろしいも  
のだとおもつてどんなに女をみても厭になる。あ  
は。

吉井 ふうん。驚いたね。全く。いくら着物が欲しい  
つたつて。

山岸 いや尤もあの女も始めつからあゝでも無かつた  
のでせう。一つは近來呉服屋が競争の結果、どんど  
ん新奇を競つたものを造へて益々女の虚榮を募らせ  
る。それもいゝが得意を繼ぐ爲に半襟の一掛や二掛  
黙つて持つてゆくのを大目にみておく風がある。そ  
れで一種の僥倖心を募らせてとう／＼あんな女を造  
らへてしまふ。いはゞ賣る方にも罪がある。

最上 全くそれはさうだ。近頃の商賣の遣り口はたゞ  
儲けさへすればいゝと云ふ風であらゆる手段で買手  
を煽る。月賦などといふことも存外好い物が安くか



へるといふので遂みんな引つ掛り、その實高い金を出すようになったて飛んだ目に逢ふ。

山岸 いや其通り。その中でもひどいのは近來流行の無盡會社だ。始めは巧みにいろ／＼な利益を説き込んで無知な連中を捲きこんで後難のないよう譯もな／＼といつて連帶保證をさせ掛金を怠たつたりといふとすぐ保證人ぐるめ財産差押へを執行する。中には充分懸金の集つた所で會社を潰して儲ける奴がある。警察の方でも充分取締りたいのだが何分法網を潜つてゐるので一寸手がつけ兼ねる。そういへば先刻もその勧誘員らしい奴が此邊を徘徊してゐたようすが近所へも充分注意させたいものです。

吉井 へえ。そうですか。

山岸 それに矢つぱり吉井さんあなたの家作だが裏にあきわといふ女がゐるでせよ。何うも彼奴好くない奴で勧誘員の手先をしてゐるらしいです。それに彼奴少し好い標致（まぶら）の女（むすめ）でもゐると旨いことをいつて藝

者なんぞに周旋したりなどする様です。

吉井 へえ。そうですか。あの婆あお世辭者で喰へない様な奴ですが、そんなことをするのですか。早速何うかしませう。

最上 だがあゝいふ婆あさんは何所の長屋にもさつと一人はゐるものですよ。

山岸 いやそうです。それで少し目に立つ娘は十二になりあ必然（きつと）抜け目なく連れ出される。長屋に美人がゐない譯ですな。

吉井 そうだ。家の子守などもちよいと目鼻立ちがばらりとしてゐるものだからいろんな事をいひに來たらしく到頭連れ出されてしまつた。

山岸 その「と腮で左の家を示し」娘などは中々氣位がある様だから連れ出されもしないが色々手を換へてこられると危険（あぶな）いものだ。

吉井 いや何うも忌（いや）な世の中になつたものだ。併してんな事がある／＼流行るのも一つは人情が變つて來

たのだ。みんな人間が贅澤になつて分相應といふことを忘れてくるからだ。下女などは十年前には縮緬などといふものは決して着なかつたものが此頃はざらだ。それにひどいのは前には小供に好い装をさせてゐたら親は何を着てゐても良かつたものだが此頃は反對だ。女の子などに安人形のような出來の洋服を着せて自分は、どつきに着飾つた女親などをよく見懸ける。

最上 いやそりや種々譯もあるでせうが一つは平等主義の影響です。文明が開けて誰れも彼れも平等だといふ考へが誰の頭にもあるのです。で金持は誰れに遠慮もなく自分の金力でやることだと擅な贅澤をする。それを見て真似をするものは己だつて金がある。出來ることだと無理をしても見得を張る。で互ひに競ひ合ふから底止する所がない。それに乗じて色々な手段を講じてその需要に應じようといふ奴がある。つまり秩序がなくなつて我勝といふ有様です。

この末は何うなるのか心ある人がみたら恐ろしいこととせう。

吉井 うん、さすがは學者だ。最上さんのいふ通りだ。それでみんな狡つ辛くなつて金にさへなりあ義理も人情もいらなといふ譯だ。忌々世の中になつたものだ。子供でも昔の様には親父の云ふこともさかない。家の兒貴の方などは朝寐をしてゐて屁理窟ばかり並べをつて偶に朝起きをするともふと相撲が始まつたので朝つばらから國技館へ日參だ。手も附けられない。最も朝起きをしてくれない方が小遣ひを使はなくなつていゝのかも知れぬ。これを思ふと植木の方がよつほど可愛い。あゝそうだ。最上さんさつき、植木の講釋をしかけたのはこうだよ。あいつ可愛がつて水をやつたり肥料をやつたりしてゐれば、ちやんと日數通りに十日なら十日目には可愛い芽を出す。その可愛いらないよ。

山岸 あは。ちやあ、吉井さんは植木で諦めてゐる

のですね。

吉井 全くさ。人はなんでも諦らめが出来なくつちや  
いけないね。君もまだ若いのだから細君に美人を持  
ちたいなどとおもひたもふな。今のような世の中  
なると飛んだ目にあふよ。

山岸 あは、だから僕も諦らめて無妻主義ですよ。

吉井 いやそれは感心。いやいかん／＼今の若さから  
それは諦めようが早過ぎる。一つこの最上さんの家  
内のようなのを搜したまへ。あは。

山岸 全くですな、あは。

吉井 いや、一寸用事で上つて飛んだ長話をした。で  
はもう失禮しよう。

山岸 やあ僕、湯かへりでつい長居をしてしまつた。

最上 やあもうお歸りですか。

吉井 いやどうも飛んだ御邪魔をした。

山岸 僕も御邪魔でした。

〔と二人挨拶して吉井は技折戸へ山岸は下手奥へ入る。最上格子戸へ

ゆき]

最上 おい、おとよ。おとよ。ちよいと帽子を持つて  
きてくれ。

おとよ 「臺所にて」は。

〔と返事して帽子を持つて格子戸より出てくる〕

おとよ おや、もう皆さん、お歸りになつたんですか。  
臺所で用をしてゐたので少とも知りませんでした。

最上 あ、今歸つた。おれは一寸昨日の仕事の刷り上  
りを見に印刷所の方へいつてくるから……

〔と行きかける〕

おとよ あ、もし、あなた。

最上 なんだ。

おとよ 「云ひ憎くそうに」あの龜が空氣銃を大變欲しがつ  
てゐるんですが……

最上 何んだな。またそんなことをいふ。買へる様に  
なつたら何時でも買つてやる。

〔と云ひ捨て、つか／＼と垣より往來へ出て下手へ入る、おとよあと

ほんやりと考へてゐる。往來の上手よりおやま、空氣銃と菓子の袋を兩手に持つた龜太郎の手をひきバラソルを駈して出る」

龜太郎 「母をみて駈けよる」母さん、おやま姉さんに空氣銃を買つて貰つたよ。

おとよ 「吃驚して」あらおやまへ。やまちやん、こんな高いものを……

おやま なあに叔母さん。いゝのよ。だつて今歸りかけるとこの子が往來でないてゐて何したのだといふと空氣銃が買つて貰へないつていふので、家へ歸つて云へば母さんに叱れるつていつてゐるのたもの、余あんまり可愛想で一緒に行つて買つてやつたの。「龜太郎に」さあ今度は大丈夫だから行つてみんなと遊んでおいでよ。

「龜太郎喜んで空氣銃と菓子と兩手に持つたま、駈け出す」

おやま あれ御菓子をみんな持つてゆくと又みんなに取られるといけないから少し持つて母さんに預けてあげよう。

「龜太郎諾きかへる。おやま菓子袋を受取り二つばかり出してやる。龜太郎また元氣よく駈け出して入る」

おやま あれまあ、あの喜こんでゆくこと。

おとよ ほんとにねえ。「おやまに」どうも有難う。定めし高いものだらうね。

おやま なあに二圓ばかりよ。

おとよ まあほんとに濟まないねえ。どうも有難うよ。ほんとに。

おやま ね、叔母さん。さつきの事ね。二圓五十錢つづ出して二人で一口入らうぢやありませんか。

おとよ あ、「と困つて」だけど夫うちのがね。

おやま ぢやあ叔母さん判だけ突ついて下さいな。叔父さんに内所で、わたしきつと迷惑なんか掛けるようなことはしないわ。

おとよ 「愈困つて」そりあお前があの子に空氣銃も買つてくれたことだし出来るなら押してあげたいが……

「こゝへ先刻のおきわと勸誘員下手奥より出る」

あきわ 奥様いかゞでございます。さつき御考へ置きを願つてあきましたことは……

勧誘員 實はあれから彼方の方でまた二口ほど御入會を願つたのもう直き満員になりますので、そなたしますと折角思し召が有りましたも已むを得ずお断はりをいたさなければなりませんような譯で、いかゞでせう。

あとよ え、ぢやあもう直満員になりますの。

勧誘員 へえ。もう直満員になります。それに今度のは廣告がはりでございますからこんな有利な御提供はもう此限り出来ませまいと存じます。

あきわ ですから奥さん。御思案は入りませんよ。お入りなさいましょ。

あとよ では全く二圓五十錢づゝ月々いれいはいのですか。

勧誘員 へえ左様で。「と折廻りより證書を出す」

あやま ぢや叔母さん入つて?

あとよ そうね。

あやま またそんなこといつてるの。ぢや辻占取つて御覽なさい。いや? ぢや私代りに取つて見るわ。

「と菓子袋の中から辻占をとり、明けてみて喜びの聲をたてる」

あら、「旨くいくよ」とあつてよ。幸先がいゝわ。大丈夫よ。叔母さん。

あとよ 「辻占をみて」ほんとだねえ。

あきわ 成程奥様こりやあ幸先がいゝ。さあ入りなさいましょ。

勧誘員 「往來の上手の廣告柱をみて」もし奥さま。あれを御覽なさい。御宅の前の神丹の廣告柱に「幸運は勇氣を要す」と書いてあります。あゝいふ廣告が御宅の前。あるのも偶然で、御奮發さへなざりあ御運は大丈夫です。

あきわ ほんとにこれは入れといはないばかりですね。

あやま ぢや叔母さん。判を出して下さいな。

おとよ 判はこゝに持つてるよ。叔父さんは出が多いから私が始終預かつて……

おやま ではその帯の間の紙入に……「と手をかけて紙入を取り判を出し」ぢやあ押してよ。「と勧誘員の差出す證書へ押しておとよに返す」

おとよ 「みて」あれいけないよ。

勧誘員 では此れで。いやどうも有難う存じます。

「と證書を折靴へ入れる」

おとよ 「覺めたように」あれいけないよ。まだほんとは……

おやま だつていゝぢやありませんか。

おとよ では全く大丈夫かえ。

勧誘員 「折靴より通ひ帳を取出し」ではこれはそちらへ。

おとよ 「受取つて」ですが懸金は今日はありませんが二三日中に。

勧誘員 いえもう何時でもよろしうございます。では失禮いたします。どうも有難う存じます。ではおさ

わさん。

おさわ あゝ行こうよ。奥様どうも有難う存じました。何れまた。

「と二人連立つて下手奥へ入る」

おやま では叔母さん。わたし今空氣銃を買つてしまつてもうお金がないから明日持つてきますよ。

おとよ あ、おまへ、吉山さんがゐなくなつて困りあしないかへ。

おやま なに一寸したものを遣りさへすりやあ懸金位すぐ出ますよ。ぢや左様なら「と垣の外へ出て往來の上手へはいる」

おとよ 「なにか考へてゐて」なあに當りさへすりあ……

「こゝへ往來の下手より最上かへつてきておとよをみつつけ」

最上 あい、おとよ、もう晝飯の支度は出来たか。

おとよ あッ「と氣が附いて」あのついで用があつたものですから……

最上 そうか、ぢやあ早くしてくれ。

「と家へ入る。こゝへ龜太郎空氣銃を持つてかへつてきたり」

龜太郎 父さん、空氣銃を……

〔おとよ、驚いて無言に引手繰り後へ隠す〕

最上 「振返つて」なに空氣銃？ な、今に買へるようになつたら買つてやるぞ。

〔と家へ入る。途端に午砲の音。續いて方々の會社の汽笛。おとよび

つくりして龜太郎を抱きふと上手の廣告柱をみて〕

おとよ 運は全く勇氣がなきよあ摺まらないわ。

〔と口でいつても不安な面持〕

幕。

